

# 令和6年能登半島地震災害支援活動報告(抄)

不動産鑑定士 今西芳夫

本年1月1日に発生した能登半島地震の被害は死者245人、負傷者1,545人、住家被害は全壊8,695棟を含め113,990棟に及びました。

(公社)日本不動産鑑定士連合会は、発災直後から石川県庁と連絡を取り、かほく市、穴水町、内灘町の3市町に不動産鑑定士を送り込み、住家被害認定に関する技術的助言を実施しました。

被災した各市町村は、他府県職員の応援を受けて住家被害1次調査を終えましたが、被災者からの相談、2次調査依頼が相次ぎました。連合会では被害棟数の多い輪島市、珠洲市を中心に5月連休以降延べ1,200人の会員を派遣して2次および3次の現場調査、報告書作成を行いました。

私は、4回にわたり現地に入り支援活動に参加して参りました。

**活動日** 令和6年6月9日(日)～11日(火)  
令和6年6月15日(土)～18日(火)  
令和6年6月26日(水)～30日(日)  
令和6年7月4日(木)～8日(月)

**実施内容** 支援する不動産鑑定士は能登空港の横にある日本航空学園の学生寮に泊まり、毎朝各自の車(レンタカーなど)で輪島市、珠洲市の住家被害認定部署に向かいます。

1日2～4カ所の現地に行き、外部、内部の調査を行います。

能登の住家の特徴は、それぞれの家屋が150～300㎡と大きいことです。

そのため、1棟の建物調査が2時間以上3時間に及ぶこともあります。

また、人口密度の低い両市は、集落が分散しています。さらに道路が分断されているため遠回りをしなければいけないところも多数あります。市役所から被害住家まで1時間くらいかかることもありました。

2次や3次調査を希望する住家は、半壊あるいは準半壊のものが多いため、建物に入れなほど壊れているものはありませんが、散乱する家具等によって住家の被害程度が分からないところがありました。



宿泊地となった航空学園寮 左手奥の4階建て建物が食堂、風呂もある寮。学生寮の空き部屋が、災害支援をしている各県、市職員、建設、鑑定士団体会員の宿泊に利用されている。長期支援者向けの仮設寮が空港西側に建てられたので、一部はそちらに移動しています。



住家被害認定調査基地と公費解体受付窓口が入っている珠洲市中央図書館





1階左側の増築部分の柱は1本折れていた。当初建物は傾斜なし。1次調査では増築部分が未登記未調査だったため、図面に基づいた調査として「準半壊」でした。



1次調査では母屋と右側の納屋が一体とされて、「準半壊」でした。接合部分を調べると柱は別、用途も別、渡り廊下の屋根が一緒に葺かれていた。別建物と認定して、納屋は「半壊」公費解体の対象となりました。





全焼となった「輪島朝市」地区



テレビで再三放送された中層建物。6ヶ月経っても状況は変わりません。



「恋路海岸」の  
「幸せの鐘」